

「乾いた九月」に関する一考察

石川和代

A Study on “Dry September”

Kazuyo ISHIKAWA

I

1931年に *Scribner* 誌上に発表された “Dry September” は、William Faulkner の代表的な短編小説の一つであり、後に *These Thirteen, Collected Stories of William Faulkner* などにも再録されている。Faulkner は、1929年の *Sartoris* から1936年の *Absalom, Absalom!* に至るまで次々と長編の大作を発表すると共に、短編集も刊行しており、この期間は、Faulkner の創作力が最も充実した、Faulkner 文学全体の中心をなす輝かしい時期であると言える。同じ時期に発表された “A Rose for Emily” に比べて、“Dry September” は、批評家の研究対象となることが少なかったようであるが、この作品も、“A Rose for Emily” と共に、Faulkner の特質を示す作品である。物語は、土埃の舞う乾燥した南部の気候の中で、白人女性が流したデマが原因となって黒人のリンチが行われるというもので、5部構成で語られる。第1部、第3部、第5部が、McLendon を中心とする、偏見に凝り固まった男たちによる黒人 Will Mayes のリンチの物語、第2部、第4部が、Will に犯されたというデマを流した Minnie Cooper の物語といった具合に、相互に関連のある二つの物語を並行させるという形になっている。この小論においては、Will Mayes のリンチの中心となった人物たちや、Will を救おうとした理髪師の Hawkshaw、Will のリンチの原因となるデマを流した Minnie について考察すると共に、作品の中で効果的に使われている幾つかの象徴についても考えてみたいと思う。

II

物語の第1部の冒頭部分では、62日間も雨が降らず乾燥した9月の黄昏の中を、Minnie と黒人についての噂が広まっていく様子が次のように描かれている：

Through the bloody September twilight, aftermath of sixty-two rainless days, it had gone like a fire in dry grass — the rumor, the story, whatever it was. Something about Miss Minnie Cooper and a Negro. Attacked, insulted, frightened: none of them, gathered in the barber shop on that Saturday evening where the ceiling fan stirred, without freshening it, the vitiated air, sending back upon them, in recurrent surges of stale pomade and lotion, their own stale breath and odors, knew exactly what had happened.¹

この冒頭部分においては、「枯草の中の火のように」という言葉で、噂がいかに素早く広まっていったかを示すと共に、土曜日の夕方に理髪店に集まっていた連中のうちで、誰一人として起きた事柄を正確に知っている者がいなかったことを読者に印象づけている。また、最初から“bloody”という言葉を使うことによって、これから一人の黒人の命がリンチという形で奪われることを暗示しているかのようである。

第1部は、この後、Will Mayesを弁護しようとするHawkshawと理髪店に来ているお客とのやりとり、McLendonの登場と続いていくのであるが、Hawkshawとお客の会話の中には、黒人に対する白人の差別意識が浮き彫りにされている。Hawkshawは、“I know Will Mayes. He’s a good nigger. And I know Miss Minnie Cooper, too She’s about forty, I reckon. She ain’t married. That’s why I don’t believe —” (39)と、勇気を出してWill Mayesを弁護し始める。彼は、40歳くらいで未婚のMinnieが、デマを流したのであり、善良なWillが実際にMinnieを犯すことなど有り得ないと信じているのである。これを聞いた若者は、“Won’t you take a white woman’s word before a nigger’s?” (39)と言うが、“I don’t believe Will Mayes did it I know Will Mayes.” (39)とHawkshawは言い、どこまでも、Willを信じてやまない。若者は、黒人を信じるHawkshawに向かって“You damn niggerlover!” (40)と嘲りの言葉を投げつける。この若者の、黒人の言葉より白人の女性の言葉を信じようとする態度には、黒人に対する差別がはっきり見られると言える。

若者の言葉を制するように、別のお客が、“Shut up, Butch We’ll get the facts in plenty of time to act.” (40)と言ったのに賛同して、Hawkshawは、“That’s right, boys Find out the truth first. I know Will Mayes.” (40)と言う。腹を立てた若者に向かって、先のお客が、“Shut up, Butch We got plenty of time.” (40)と言うと、もう一人別のお客が体を起こして、“Do you claim that anything excuses a nigger attacking a white woman? Do you mean to tell me you are a white man and you’ll stand for it? You better go back North where you came from. The South don’t want your kind here.” (40-41)と発言する。この言葉にも、黒人に対する白人の差別意識が表れている。

この後、Will Mayesのリンチの中心となるMcLendonが登場する。彼は、フランスの前線で部隊を指揮した経験があり、武功章をもらった人物である。McLendonは、理髪店に入って来るなり、“Well are you going to sit there and let a black son rape a white woman on the streets of Jefferson?” (41)と言う。これを聞いたお客が“Did it really happen? This ain’t the first man scare she ever had, like Hawkshaw says. Wasn’t there something about a man on the kitchen roof, watching her undress, about a year ago?” (41)と言うと、彼に向かってMcLendonは、“Happen? What the hell difference does it make? Are you going to let the black sons get away with it until one really does it?” (41-42)と言うのである。McLendonにとって、Will Mayesが実際にMinnie Cooperを犯したかどうかは問題ではなく、彼は、事件が起こらないうちに、そのような事件を起こす可能性のある黒人のリンチを行おうと考えているのであり、理髪店に集まっている者たちの中で、黒人に対して最も激しい差別意識を持っているのは、McLendonであると言える。“Who’s with me?” (42)とMcLendonに言われて、その場にいたお客たちは、次々と彼について行き、リンチへと一気に進んで行くが、Hawkshawは、それを止めようと、店から走り出す。

第3部では、この後、男たちが車でWill Mayesのリンチに向かう様子が描かれる。Hawkshawは、McLendonと他の3人の男たちに追いつき、彼らと共に車に乗り込み、ここでも

Will Mayes を弁護しようとして、“Will Mayes never done it, boys If anybody done it. Why, you all know well as I do there ain't any town where they got better niggers than us. And you know how a lady will kind of think things about men when there ain't any reason to, and Miss Minnie anyway —” (46) と言うが、McLendon と男たちは Hawkshaw の言葉には耳を貸さず、一気にリンチに向かう。Will Mayes が夜警として働いている製氷工場に着いた時、Hawkshaw は、“Listen here, boys if he's here, don't that prove he never done it? Don't it? If it was him, he would run. Don't you see he would?” (46-47) と言って、更に Will Mayes を弁護しようとするが、誰も耳を貸すことはない。

McLendon に呼ばれて姿を現した Will Mayse は、“What is it, captains? I ain't done nothing. 'Fore God, Mr. John ” (47) と言うが、McLendon と男たちは彼に手錠を掛け、車に乗り込ませ、リンチを行う場所へと車を走らせる。リンチの場面は描かれませんが、リンチの場所となる廃棄された煉瓦工場とそこに続く道については、次のように描かれている：

Presently McLendon turned into a narrow road. It was rutted with disuse. It led back to an abandoned brick kiln — a series of reddish mounds and weed-and vine-choked vats without bottom. It had been used for pasture once, until one day the owner missed one of his mules. Although he prodded carefully in the vats with a long pole, he could not even find the bottom of them. (49)

ここから、リンチを行う場所が、かつてそこに落ちたラバが見つからなかった程深い、底無しの大桶であり、Will Mayes がそこへ投げ込まれるならば2度とはい上がることができず、死ぬに違いない場所であることが分かる。

Hawkshaw は、Will Mayes を何度も弁護しようとして努力したわけであるが、それが無駄であり、リンチをやめさせることができないと知ると、車のドアを蹴飛ばすようにあけ、猛スピードで走る車から飛び降りる。彼は、息がつまり、吐き気を感じながら、びっこをひいて町の方へ向かって歩いて行くが、その時、Will Mayes のリンチを終えて町に向かう車を見かける。この様に、McLendon と男たちは、黒人 Will Mayes を弁護しようとする Hawkshaw の言うことには一切耳を貸さず、Will Mayes が実際に白人女性の Minnie を犯したかどうか、真実を確かめることもせず、Will Mayes という一人の人間の命を奪うのである。Hyatt H. Waggoner が、“‘Dry September’ is a uniquely valuable comment on a local social condition, a compressed exploration of the psychology of the lynch mob and of the racial situation in the South.”²と述べているように、この作品は、南部の人種差別の状態を巧みに描いていると言える。

第3部は、以上のようなストーリーであるが、ここでは、“dust” と “moon” が象徴として巧妙に使われていると思われる。McLendon と男たちが Will Mayse の働いている製氷工場へ車を走らせる場面では、“Dust lay like fog in the street” (46) とか、“Dust hung above it too, and above all the land.” (46)、製氷工場に着いた場面では、“There was no sound in it save their lungs as they sought air in the parched dust in which for two months they had lived” (47) と描写されていて、その息苦しさが伝わって来るようである。また、McLendon が Will Mayse を呼ぶ場面の後の箇所では、“Below the east the wan hemorrhage of the moon increased. It heaved above the ridge, silvering the air, the dust, so that they seemed to breathe, live in a bowl of molten lead.” (47) とある。これから一人の人間の命が奪われるという状況を前にして、月の色を表すのに “hemorrhage” という言葉を使ったのは効果的であると言える。この後 “dust” と “moon” が使われているのは、Hawkshaw が走っている車から飛び降りた直後、町に向かって

歩いて行く場面においてである：

The moon was higher, riding high and clear of the dust at last, and after a while the town began to glare beneath the dust. He went on, limping. Presently he heard cars and the glow of them grew in the dust behind him and he left the road and crouched again in the weeds until they passed. McLendon's car came last now. There were four people in it and Butch was not on the running board. (49-50)

ここでは、月は高くのぼり、土埃のとどかないところにあり、町が土埃の下できらきらと光っているが、先の場面の月とは違って、やっと月も本来の輝きを取り戻したようである。一人の黒人 Will Mayes の命を救おうと努力し、それが無理だと知るや、リンチに向かう車から飛び降りた Hawkshaw を照らすのは、本来の美しい月の光であって当然ではないだろうか。なぜなら、登場人物たちの中で Will Mayes を救おうとしたのは、Hawkshaw ただ一人であったからである。Hawkshaw は、Will Mayes を実際に救うことはできなかったのだが、一人の人間の命を救おうとする行為によって、Howard Faulkner の、“If Hawkshaw has not been able to save Will Mayes, he has at least been able to save himself.”³という指摘のように、自分自身を救うことはできたと言えるかもしれない。

車から飛び降りて、びっこをひきながら歩いている Hawkshaw が、リンチを終えて町に向かう男たちの車を見かける場面では、“They went on; the dust swallowed them; the glare and the sound died away. The dust of them hung for a while, but soon the eternal dust absorbed it again. The barber climbed back onto the road and limped on toward town.” (50) というように、“dust” が使われている。ここで、男たちの車が巻きあげた “dust” が、“the eternal dust” と一緒になってしまうことについて、Arthur L. Ford は、“The ever-present dust, which encloses everything, perhaps refer to the guilt of the town or the crime itself which none of the people can escape. But more probably it stands for the whole perverted attitude of the Southern town.”⁴と述べているが、Faulkner は、ここでも “dust” を象徴として巧みに使っているのである。

次に、Will Mayes に犯されたというデマを流した白人女性 Minnie Cooper について考えてみたい。Minnie について、第2部の冒頭には “She was thirty-eight or thirty-nine. She lived in a small frame house with her invalid mother and a thin, sallow, unflagging aunt” (43) とあり、彼女が中年の独身女性であることが分かる。Minnie は、裕福な家の娘で、ハイスクール時代には、町の社交界でも人気のある存在であったが、彼女より目立たなかった連中と立場が逆になる時がやって来る：“She was the last to realize that she was losing ground; that those among whom she had been a little brighter and louder flame than any other were beginning to learn the pleasure of snobbery — male — and retaliation — female.” (44) この頃から彼女の顔は、“that bright, haggard look” (44) を浮かべ始め、パーティーに出かける時も、“a mask or a flag” (44) のように、その表情を浮かべているが、彼女の目には、“that bafflement of furious repudiation of truth” (44) が浮かんでいるのである。そして、ある晩パーティーで、同級生だった青年と娘の会話を立ち聞きして以後、2度と招待には応じなくなる。

彼女の友人たちは結婚して母親になるが、彼女を訪ねて来る男性はなく、友人の子供たちから “aunty” (44) と呼ばれるようになる。やがて、彼女は銀行の支配人で、40歳ぐらいのやもめの男性とデートするようになるが、これはほんの一時期のことであり、Will Mayes に犯されたというデマを流した今回の出来事より12年前のことである。現在では、彼女が明るいドレスを着て下町へ一人で出かけても、“. . . the sitting and lounging men did not even follow her with

their eyes any more.” (45)とあるように、男たちは彼女の姿を目で追うことすらしなくなっている。若い頃、町の社交界で人気のあった彼女にとって、自分に対して関心を持ってもらえないという状況は耐えがたいものであり、彼女は人の関心を引こうとしてデマを流したと推測できるのである。

第4部の冒頭では、Will Mayes のリンチが行われる土曜日の夕方、Minnie Cooper の体が熱っぽくなり、手が震える様子が描かれるが、Minnie は、自分の流したデマのために、一人の黒人 Will Mayes の命が奪われることになることになると予測できたと思われるので、彼女がこの夕方、興奮のためか、体が熱っぽくなり、手が震えるのは不思議ではないと言える。また、“her sheerest underthings and stockings and a new voile dress” (50)を彼女が身に付ける点からは、彼女が、人の関心を引こうとして、年齢より若く見えるようにしているのがよく分かる。

Minnie は、4人の友人と一緒に映画を見に出かけるのだが、町の広場に向かって歩いて行く時、体が震え始め、それが止まるまで “breathe deeply, something like a swimmer preparing to dive” (50)し始める。震えは一度は止まるが、広場に近づくと、彼女は再び震え始め、頭をかかげ、両手を脇腹のところで握り締めて歩く。だが、広場に入ると、前よりも一層震え始め、歩みはますます遅くなり、彼女は、“her head up and her eyes bright in the haggard banner of her face” (50)という様子で、ホテルの前を通り過ぎて行く。この時、その辺りに座っている行商人たちは、一人が “That’s the one: see? The one in pink in the middle.” (50) と言えば、相手が、“Is that her? What did they do with the nigger? Did they —?” (50) と言うといった具合に、好奇心を持って、Minnie の噂をする。そして、彼女がドラッグストアの前に来ると、“... even the young men lounging in the doorway tipped their hats and followed with their eyes the motion of her hips and legs when she passed.” (51)とあるように、第2部とは違って、男たちは彼女の腰や足の動きを目で追うのである。ここで、彼女は、若い頃とは全く違った意味で、人の関心を引くことになったのである。彼女たちが到着した映画館については、“It was like a miniature fairyland with its lighted lobby and colored lithographs of life caught in its terrible and beautiful mutations.” (51)とあり、映画館が彼女にとって、現実の生活から離れた夢の世界であることを示しているようである。Minnie と友人たちが座った座席からは、映画館に若い男女が幾組もならんで入って来るのがよく見えるのだが、映画が始まる前から、Minnie の唇はひりひりと乾き始め、笑いが込み上げてくる。彼女は何とか笑いを抑えるが、映画が始まると笑いを抑えることはできなくなり、声を上げて笑い始める：

The lights flicked away; the screen glowed silver, and soon life began to unfold, beautiful and passionate and sad, while still the young men and girls entered, scented and sibilant in the half dark, their paired backs in silhouette delicate and sleek, their slim, quick bodies awkward, divinely young, while beyond them the silver dream accumulated, inevitably on and on. She began to laugh. (51)

笑い声は、抑えようとすればするほど高くなり、友人たちが、彼女を外に連れ出しても、彼女は甲高い調子で笑い続けるのである。友人たちは、彼女を家まで送って行き、服や下着を脱がせてベッドに寝かせ、氷を割って彼女のこめかみを冷やしたりして看護する。氷が冷たい間はかろうじて笑いが止まり、呻き声になるが、すぐにまた笑いが止まらなくなり悲鳴のように高まるのである。映画の中で展開する「美しく情熱的で物悲しい」人生と、映画館に入ってくる「神々しいほど若い」男女の様子を見て、Minnie が声を上げて笑い始める点を考えるならば、Arthur L. Ford が、“Through the juxtaposition of the young people and the movie screen, Min-

nie has now seen the futility and ludicrousness of her dream.”⁵と述べているように、若い頃のように人の関心を引こうとしたことが、いかに虚しい夢であったかに気付いたのかもしれない。このように見てみると、Will Mayes のリンチにつながるようなデマを流した Minnie の責任は重い、彼女の人生も幸福ではなく、哀れさを誘うのである。また、先に引用した第3部の、McLendon が Will Mayes を呼ぶ場面の後の箇所で、“silvering the air, the dust” という形で使われていた “silver” という言葉が、ここでは、“the screen glowed silver” と “the silver dream” というように使われている。第3部の場面とこの第4部の Minnie の場面が、土曜日の夜の大体同じ時刻に当たるので、作者は意図的に使ったのではないかと思われる。第5部では、Will Mayes のリンチを終えた McLendon が家に帰った場面が、簡潔に描かれる。彼は、夜遅くまで起きて彼の帰りを待っていた妻を叱った後、引き裂くようにしてシャツを脱ぎ、次々と吹き出す汗を脱ぎ捨てたシャツで拭き、網戸に体を押しつけるようにして、あえぎながらベランダに立っているが、その外の世界は次のように描かれている：“There was no movement, no sound, not even an insect. The dark world seemed to lie stricken beneath the cold moon and the lidless stars.” (53) 単なる噂が原因となって、罪のない一人の黒人の命がいとも簡単に奪われる世界を描くのに、“stricken” という言葉を使ったのは、効果的であると言える。

以上のように、この作品について考えてみると、Will Mayes のリンチの中心となった人物たち、Will を救おうと努力した唯一の人物 Hawkshaw、Will Mayes に犯されたというデマを流した Minnie の、それぞれの状況が明確に巧みに描かれると共に、“dust” や “moon” や “silver” などの言葉が、極めて効果的に使われており、Hyatt H. Waggoner の “The story seems to me one of Faulkner’s finest.”⁶ という意見に賛同せずにはいられないのである。

註

- 1 William Faulkner, *These Thirteen* (London: Chatto and Windus, 1963), 39. 以後、この作品からの引用はこの版によるものとし、引用箇所の後の括弧内に、その頁を記す。
- 2 Hyatt H. Waggoner, *William Faulkner: From Jefferson to the World* (Lexington: University of Kentucky Press, 1959), 198.
- 3 Howard Faulkner, “The Stricken World of ‘Dry September’,” *Studies in Short Fiction*, 10 (1973), 48.
- 4 Arthur L. Ford, “Dust and Dreams: A Study of Faulkner’s ‘Dry September’,” *College English*, 24 (1962), 219.
- 5 Arthur L. Ford, 220.
- 6 Hyatt H. Waggoner, 199.